

参加者氏名：岡村 恵

卒業年：2016年 卒業学部：文学部

「現地を訪問し思うこと」

震災から5年が経ち、被災地の事が報道される機会が減り時間とともに状況は変わっているのだろうと思っていました。確かに、仙台駅は人で溢れ、震災の被害を感じさせないくらいの明るさでした。

一方、南三陸・女川へ向かうと辺り一面建物がなく土地のかさ上げ工事が行われており、街中工事されているような異様な雰囲気でした。報道されていなかった分、自分の目で見たその光景は、衝撃的でした。またツアーの中で、家族を失った方の話、会社の工場を全て失った、ささ圭さんのお話、南三陸で被災した学校の先生のお話、河北新報社の記者の方のお話を聞くことが出来ました。それぞれの方がご自分の体験や想いをまっすぐ伝えてくださったことがとても心に残っています。また、津波ですべて飲み込まれた街である閉上の土地を歩いた時に感じたしずけさの中に多くの人が亡くなり、街ごとを失うということ、形はない思い出、今までの生活を失うことを物語っているように感じて言葉を失いました。

被災された方々のお話を聞き、被災地を自分の目でみて足をふみ入れた体験を通して、震災から時間が経ち、何事もなかったように世の中は動いていても簡単に整理することのできない様々な想い、傷が残っていることを感じました。

また、被災地の方々のお話のなかで、“自分で自分の身を守り、同じ被災地であっても助けられる側ではなく、助ける側にまわる人が多くなるのが、支えあいを生むということ。この為には小さな備えを積み重ねていくことが一番の防災になる”というメッセージが印象に残りました。

眠る時に携帯を充電しておくことや、必要最低限の防災グッズを用意しておく、ベッド周りに置いておくなど、自分が出来る範囲での小さな備えをしていこうと思いました。

最後に、今回のツアーを通して、想ったこと感じたこと、出会いや繋がりを忘れないこと、そして自分の言葉で家族や友達、会社の人などに伝えることで、被災地・災害への意識を風化させずに大切に続けようと思います。

以上